

教育講演 5

リキッドバイオプシーの臨床実装



西尾 和人

近畿大学医学部ゲノム生物学教室

がん診療においては、血漿循環腫瘍DNAを用いたコンパニオン診断薬として、EGFR、RAS遺伝子検査に続きMET exon 14 skipping 検査が臨床実装された。また、がんゲノム医療として血漿循環腫瘍DNAを用いた、ゲノムプロファイリング(CGP)検査も用いることができるようになった。我が国においては、一般的に複数回のCGP検査は許容されず、腫瘍組織と血漿検体のいずれを用いるかが新たな課題となる。リキッドバイオプシーの利点と注意点に留意しながら、組織検体に比して血漿検体を用いることが優先される状況においては、積極的に血漿検査を実施する。リキッドバイオプシーの

利点としては、低侵襲、リアルタイム、不均一性の克服などである。一方、偽陰性やクローン性造血などに注意を払う必要がある。

リキッドバイオプシーの臨床応用としては、治療層別化、耐性把握をはじめとして、早期発見、スクリーニングから治療モニタリングまで多岐にわたる。注目されているのは、手術など根治的治療の後、リキッドバイオプシー検査を用いて微小残存病変(ctDNA変異)の有無を判定し、再発の予測するMRD検査である。リキッドバイオプシー研究の展望として、血液中の細菌叢(blood microbiome)やctDNAメチル化による原発臓器同定のアプローチなどを紹介する。

略歴

1986年和歌山県立医科大学卒業後、同附属病院にて内科研修、助手、1990年より国立がんセンター研究所リサーチレジデント、薬効試験部研究員、耐性研究室室長を経て、2006年より近畿大学医学部ゲノム生物学講座教授、2014年より同大学ゲノムセンター長を兼任。日本臨床腫瘍学会、日本がん分子標的治療学会等理事、西日本がん研究機構常任理事等、専門は、腫瘍生物学、分子標的治療薬とバイオマーカー